

関西経済を牽引する空港へ



阪急阪神ホールディングス株式会社
代表取締役社長

角 和夫

世界的な同時不況の影響により、国際航空貨物取扱実績は11月以降、軒並み減少が続いています。金融経済のみならず実体経済までもがこれほど短期間に大きなダメージを受けるとは、経済のグローバル化が予想以上に進んでいると実感しています。従来は、アメリカの過剰消費が世界を牽引してきましたが、不況に陥った今、BRICsやNEXT11に代表される新興国への期待が高まっており、とりわけ日本にとっては東アジアとの関係が一層重要になるでしょう。よって、日本が国際競争力をさらに強化するためには、東アジアと位置的に最も近い関西において、関西国際空港や港を結ぶ道路やベイエリアなどの基盤整備がポイントになってくると考えています。

さて、関西を基盤に事業を展開する阪急阪神ホールディングスグループにおいても、関西国際空港に対する期待は絶大です。とりわけコア事業の一つである「旅行・国際輸送事業」は関西国際空港の将来と大きく関係を有すると考えています。

まず旅行事業については、当グループが得意とする中国への路線の充実には目覚しく、さらなる期待を寄せる一方で、得意エリアの双壁であるヨーロッパ路線が先細り傾向であることが残念でなりません。ヨーロッパ方面への旅行は依然人気が高いことから、路線の充実が旅行事業にとって重要だと考えています。

国際輸送事業では、昨年、空港内に施設を

開設しました。ところが現下の不況により、冒頭で申し上げたとおり国際貨物への厳しい逆境の中、当グループも足元の状況はたいへん厳しく、中期経営計画の見直しを行っています。しかし、業界全体が後向き思考に陥る中、長期的展望に立ち、国際貨物の24時間ハブ空港としての利点を最大限に生かすことで、関西のみならず、日本の、また東アジアにおける最大拠点となることが関西国際空港の使命ではないでしょうか。

周知のごとく、関西国際空港は環大阪湾工業地帯の成長の鍵を握ると言っても過言ではありません。さらに、大阪湾岸のみならず、広く関西には世界をリードする先端企業群が多くあり、なかでも京都地区の私どものお客様企業の航空貨物利用には目を見張るものがあります。まさに、グレーター関西圏全体の今後の経済の命運を握っていると言えるのではないのでしょうか。

現在、輸出産業はたいへん困難な状況下ですが、視点をさらにもう一步先に見据え、景気回復の暁には関西国際空港が先頭にたって関西経済を牽引できるよう、準備万端をお願いする次第です。